様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：１２１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０９９９４

研究課題名（和文）女子大学生のうつ病の発症に影響する社会的要因の研究－男女共同参画社会に向けて－

研究課題名（英文）Social factors related to the onset of depression among Japanese female univesrsity studentsv

研究代表者
布施　泰子（Fuse-Nagase, Yasuko）

茨城大学・保健管理センター・教授

研究者番号：６０６４７７２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：うつ病は男性より女性に多いことが知られている。男女差の要因として、女性ホルモンの影響などの生物学的要因が強調されているが、社会的要因については十分に検討されてこなかった。日本の社会において、女性は社会的な弱者であり、このことがうつ病の発症に影響しているのではないかと考えられる。そこで我々は、うつ病と診断された女子大学生のカルテを調査した。カルテ調査からは、小児期のネガティブライフイベントがうつ病の発症と関連していることがわかった。また、男女の大学生を対象としたアンケートを行った。アンケートからは、女子大学生の精神的健康度の低さと、暴力の被害や性差別の経験が関連していることがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって、女性のうつ病は、女性が男性に比べて性差別を受けやすいことや、男性に比べて暴力の被害者になりやすいことなど、女性が社会的弱者であるということの影響を受けていることが明らかとなった。この結果は社会的意義が大きいと考える。残念な結果ではあるが、社会的要因は、将来的に変えていくことができるものでもある。

研究成果の概要（英文）：Depression is more common among women than men. Biological factors such as hormonal effects have been emphasized as factors of sex differences. However, social factors have not been fully investigated, yet. In Japanese society, women are socially vulnerable, and this may affect the sex difference in depression. We investigated the medical charts of female university students who were diagnosed with depression. We found that negative life events in childhood were associated with the development of depression. We also conducted a questionnaire targeting male and female university students. We found that the poor mental health among female university students was associated with associated with the experience of being victims of violence and sexism.

研究分野：精神医学

キーワード：女子大学生　うつ病　社会的要因　男女共同参画

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)うつ病は女性に多い

うつ病は女性に多い疾患で、発症のリスク比は男性の約 1.7-2.7 倍と報告されている。その理由の一つとして、生物学的要因（女性ホルモンの影響）があり、周産期うつ病、更年期うつ病と関連付けた報告が多数ある。一方、男性と女性を取り巻く社会状況は異なっており、社会的要因についても生物学的要因と共に検討されるべきである。しかし、社会的要因についてははるかに報告が少ない。

(2)女子大学生のうつ病

大学卒業前の最終学年では、就職活動での性差別など、女性は社会的性差をネガティブに意識することが多い。

２．研究の目的

本研究では、以下の３点を明らかにすることを目的とした。

(1)うつ病を発症した女子大学生が、その背景にどのような社会的要因を有しているか。

(2)「(1)」で抽出されたうつ病の社会的要因を、学部の最終学年である４年生の女子学生が、どれくらいの頻度で有して社会に出るのか。

(3)社会に出た大卒女性のうつ症状と、大学時代に持っていた社会的要因の関連はあるか(社会的要因を抱えて卒業する学生が、実際にうつ病になりやすいのか)。

３．研究の方法

(1)症例調査

四つの大学（それぞれ、大規模総合大学、大規模理工系大学、地方の中規模総合大学、女子大学)に在学中に、うつ病と診断され、大学の保健管理施設に記録の保存されている症例について、情報を収集した。保健管理施設のカルテを元に、生活史や病歴についてデータシートを作成した。得られたデータを質的データの分析ソフトである MAXQDA を利用して、分析を行った。

(2)質問紙調査

症例調査の結果と先行研究を元に、質問紙を作成した。質問紙は、これまでにネガティブライフイベント（暴力の被害、性差別、両親の別離などの項目）を経験したかどうか、大学生活に関してどのような負担を感じているか、をそれぞれ有無の選択式で回答する質問と、Kessler Psychological Distress Scale 10（以下 K10。メンタルヘルスの評価尺度）から構成されている。３つの大学の学部四年生と、修士課程の２年生を対象として調査を行った。

(3)追跡調査

質問紙調査に参加した学生のうち、同意の得られた学生を対象に、卒業後約半年たった時点で K10 への回答を依頼した。

４．研究成果

(1)症例調査の結果

50 人分のカルテの分析を行って、34 のコードが抽出され、9 つのサブカテゴリー＜両親の離婚等とそれに伴う変化＞＜養育者の関心不足や理解力不足＞＜養育者の過干渉や押し付け＞＜直接間接の暴力被害＞＜入学に関連すること＞＜学業以外の大学生活＞＜研究に伴うこと＞＜大学から実社会への移行＞＜多忙による疲労＞と２つのカテゴリー【養育環境関連】と【大学生活関連】が生成された。表 1、表 2 にそれぞれのカテゴリー、サブカテゴリー、コードと具体例を示す。

大学生活に関するストレスが女子大学生のうつ病の発症に関連していることは当初から想像できていたが、合わせて養育環境関連の要因が大きいことが明らかとなった。

表 1

カテゴリー	サブカテゴリー	人数	コード	人数	具体例
養育環境関連	両親の離婚等とそれに伴う変化	7	両親が離婚以下詳細情報なし	3	
			両親が離婚して母親が再婚	2	
			両親が離婚して父親が再婚	1	・継母が来て、家で気遣いがあった
			両親が離婚して実母と別離	2	・母親が家を出た
			両親が離婚して親戚の家に転居	1	・数年間伯父・祖母の家から学校に通った
	養育者の関心不足や理解力不足	5	母親のケア力不足	3	・母親は体調が悪くて自分のことで精一杯で話をきいてくれない ・母親が情緒的に未熟で、心を砕いて本人と話をするタイプではない
			両親とも高卒で大学教育に理解がない	1	
			親が無関心	1	
			両親に相談しても取り合わない	1	・両親は患者に理解なく困りごとを相談しても全くとりあわない
	養育者の過干渉や押し付け	7	母親が過干渉	1	・母は私のことを真似しようとする
			父親が過干渉	1	
			両親の期待が大きいという自覚	1	・両親の期待が大きく、自分が家族を支えていると感じていた
			親が医学部に固執	1	
			身体疾患のため母子分離が不十分	1	・心室中隔欠損があり、そのケアのために母子分離が進まなかった
			両親が新宗教の熱心な信者	1	・両親が新宗教の熱心な信者で、自分の意思に反して宗教教育を行う高校に通うことを強要された
			男尊女卑の家庭	1	
	直接間接の暴力被害	7	性暴力の直接間接の被害	1	・母親のパートナーからの性的暴力、
				1	・母親のパートナーから同胞への性的暴力
			家庭内暴力	5	・成績が悪いとすぎぶたれた ・父が兄に繰り返し暴力を振るっていた

表 2

カテゴリー	サブカテゴリー	人数	コード	人数	記載例
大学生活関連	入学に関連すること	6	環境の変化に伴う不適応	2	大学入学に伴って環境が変化 寮生活を始めた
			不本意入学	1	XX大学OO学部を受けたが最終選考で不合格だった
			大学受験	1	両親と同じ（レベルの高い）大学への進学を希望
			大学合格後の目標の喪失	2	大楽に合格するのが目標でそのあとの目標を見失った
	学業以外の大学生活	6	大学の人間関係の悪化	2	バンドのメンバーとの関係の悪化、 研究室の同期と不仲で必要な連絡が漏れたりした
			経済的困窮	2	父親のリストラ
			親しい人との死別	3	親友が急死
	研究に伴うこと	10	外的要因による研究への興味喪失	1	・テーマが自分の希望するものと大きく異なった
			研究に伴う困難	8	・指導教員の変更 ・指導教員の専門分野とテーマが異なり、十分な指導を受けられなかった ・研究が思うように進まない ・学位論文がなかなか受理されない
			研究が忙しい（多忙による疲労と重複）	5	・長い時間を要する実験 ・複数の学会発表の準備が重なった ・共同研究者が教職の単位を取っていて研究に十分時間を割けず、自分の負担が増した
			研究継続に伴う不安	1	・出産と研究の両立に不安
	大学から実社会への移行	11	就職活動の困難	11	・就職が決まらない。自分が否定されているように感じた ・女性は結婚や出産で退職すると思われているから、同じく選考に残ったら、男子の方が有利
	多忙による疲労	14	学業	6	・教育実習で多忙
			卒論と就活が重なる	2	・就職活動と卒業研究を並行して行なっている
			課外活動	4	・居酒屋のアルバイトを掛け持ちした ・学園祭の実行委員で忙しかった
			遠距離通学	1	・一人暮らしをしたかったが認められず、毎日長時間かけて通学

(2)質問紙調査の結果

1,068 人の有効回答を得た。内訳は、学部 4 年生が 808 人、大学院修士課程 2 年生が 260 人で、男性が 593 人、女性が 475 人であった。K10 の最頻値は 0、中央値は 3、第 1 第 3 四分位はそれぞれ 0、9 であった。K10 にスコアについて、男女で有意差はなかった。K10 のスコアが日本語版 K10 のカットオフ値である 15 点以上であった者の数は、158 人で、割合において男女で有意差はなかった。

女性の K10 のスコアには、暴力の被害にあった経験と性差別を受けた経験の二つのネガティブライフイベントが影響していた。男性については、これらのネガティブライフイベントの経験率が、女性と比べて有意に低かった。

(3)追跡調査の結果

質問紙調査に参加した学生の役 1 割から、追跡調査の回答を得た。そのうち社会人として就労している者は 76 人で、K10 のスコアについて大学生の時と比較して有意な変化は認められなかった。この結果には、追跡調査のサンプル数が十分に大きくないことや、K10 の評価尺度としての限界が影響している可能性がある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 布施泰子、本田善一郎、渡邉慶一郎、丸谷俊之、山崎恵	４．巻 4
２．論文標題 女子大学生のうつ病の社会的要因：カルテベースの調査結果	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学のメンタルヘルス	６．最初と最後の頁 93-93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Yasuko Fuse-Nagase	４．巻 4
２．論文標題 High gender division of labor consciousness among Japanese university students: An awareness survey	５．発行年 2021年
３．雑誌名 College Mental Health	６．最初と最後の頁 134-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Fuse-Nagase Yasuko、Kuroda Takuya、Watanabe Junko	４．巻 54
２．論文標題 Mental health of university freshmen in Japan during the COVID-19 pandemic: Screening with Kessler psychological distress scale (K6)	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Asian Journal of Psychiatry	６．最初と最後の頁 102407-102407
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.ajp.2020.102407	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 布施泰子、梶谷康介、平井伸英、佐藤武、苗村育郎	４．巻 4
２．論文標題 大学における休学・退学・留年学生に関する調査－第40報（平成29年度調査結果）－	５．発行年 2021年
３．雑誌名 大学のメンタルヘルス	６．最初と最後の頁 47-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 布施泰子、黒田卓哉、叶香代、渡部潤子、佐藤優也、長谷川福子、小杉祥子、青柳賢治、飯島晴恵	4．巻 4
2．論文標題 大学におけるリモートカウンセリング発展の可能性：Covid-19の流行をきっかけに起こったことと援助者側の視点からの考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 大学のメンタルヘルス	6．最初と最後の頁 121-123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 布施泰子	4．巻 57
2．論文標題 学部学生の死亡調査の結果から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 CAMPUS HEALTH	6．最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 執行三佳、河野美江、武田美輪子、折橋洋介、大草亘孝、川島渉、布施泰子	4．巻 3
2．論文標題 KH coderを用いた大学生の性暴力をめぐる自由記述分析の一考察	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大学のメンタルヘルス	6．最初と最後の頁 135-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 河野美江、執行三佳、武田美輪子、岡本百合、折橋洋介、大草亘孝、川島渉、布施泰子、清水幸登	4．巻 3
2．論文標題 大学における性暴力被害学生への支援：学生支援部門の教職員対象アンケート調査より	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大学のメンタルヘルス	6．最初と最後の頁 107-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 布施泰子、 梶谷康介、平井伸英、苗村育郎、佐藤武	4．巻 3
2．論文標題 大学における休学・退学・留年学生に関する調査－第39報（平成28年度調査結果）－	5．発行年 2019年
3．雑誌名 大学のメンタルヘルス	6．最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Yasuko Fuse-Nagase, Katsuhiro Yasumi, Nobuhide Hirai, Marutani Toshiyuki, Kosuke Kajitani, Ikuro Namura	4．巻 269/ supple
2．論文標題 Distribution of psychiatric disorders causing non-graduation among Japanese national undergraduate university students: Has clinical manifestation of schizophrenia become less severe?	5．発行年 2019年
3．雑誌名 European Archives of Psychiatry and Clinical Research	6．最初と最後の頁 S99-S99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 布施泰子	4．巻 121
2．論文標題 出産・育児を経験した日本の女性精神科医の、医師として活動するための対処行動とニーズに関する質的研究	5．発行年 2019年
3．雑誌名 精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 457-472
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　0件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 Yasuko Fuse-Nagase, Zen-Ichiro Honda, Keiichiro Watanabe, Toshiyuki Marutani, Megumi Yamazaki
2．発表標題 Factors related to the onset of major depressive disorder among female university students in Japan
3．学会等名 ACHA 2020 Virtual Poster Session
4．発表年 2020年

１．発表者名 加茂登志子、安藤久美子、穴水幸子、早苗麻子、安川節子、布施泰子、三原伊保子
２．発表標題 ともに働きやすい社会へ－女性精神科医のさらなる活躍をめざす
３．学会等名 日本精神神経学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 加茂登志子、安川節子、布施泰子、内田淳子、田﨑みどり、林みづ穂
２．発表標題 様々な場所で働く女性精神科医の仕事を知ろう
３．学会等名 日本精神神経学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 布施泰子、渡邊雅彦、小松洋子、薄井直子、黒田卓哉、渡部潤子
２．発表標題 茨城大学の学部新入生を対象とメンタルヘルススクリーニングの結果から
３．学会等名 第58回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 布施泰子、梶谷康介、平井伸英、佐藤武、苗村育郎
２．発表標題 大学における休学・退学・留年学生に関する調査第41報（2018年度分の集計結果から）
３．学会等名 第58回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 布施泰子、渡邊雅彦、小松洋子、忠鉢典代、深谷美架、薄井直子、叶香代、黒田卓哉、渡部潤子、佐藤優也、長谷川福子、小杉祥子、青柳賢治、飯島晴恵
２．発表標題 大学におけるリモートカウンセリング発展の可能性：COVID-19の流行をきっかけに起こったことと考察
３．学会等名 第58回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 布施泰子、梶谷康介、平井伸英、佐藤武、苗村育郎
２．発表標題 大学における休学・退学・留年学生に関する調査-2018 年度の調査結果より-
３．学会等名 第42回全国大学メンタルヘルス学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 布施泰子、本田善一郎、渡辺慶一郎、山崎恵
２．発表標題 女子大学生のうつ病の社会的要因：カルテベースの調査結果
３．学会等名 第41回全国大学メンタルヘルス学会総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuko Fuse-Nagase, Katsuhiro Yasumi, Nobuhide Hirai, Marutani Toshiyuki, Kosuke Kajitani, Ikuro Namura
２．発表標題 Distribution of psychiatric disorders causing non-graduation among Japanese national undergraduate university students: Has clinical manifestation of schizophrenia become less severe?
３．学会等名 7th European Conference on Schizophrenia Research（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安藤久美子、加茂登志子、布施泰子　他
２．発表標題 精神科領域におけるダイバーシティとワークライフマネージメントの現状:2017 年調査 ―第 2 報
３．学会等名 第115回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuko Fuse-Nagase
２．発表標題 Qualitative research on coping behaviors and needs of Japanese female psychiatrists who experienced childbirth and child-rearing
３．学会等名 8th World Congress of International Association of Women's Mental Health（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuko Fuse-Nagase
２．発表標題 Gender division of labor consciousness among Japanese university students: second report-
３．学会等名 8th World Congress of International Association of Women's Mental Health（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuko Fuse-Nagase and Nagafumi Doi
２．発表標題 Upper airway resistance syndrome with a small mandible is not rare among Japanese female
３．学会等名 24th Congress of European Sleep Research Society（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 布施泰子
２．発表標題 出産・育児を経験した女性精神科医の、医師として活動するための対処行動とニーズに関する研究
３．学会等名 第114回日本精神神経学会学術総会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡辺　慶一郎 (Watanabe Kei-ichiro) (10323586)	東京大学・相談支援研究開発センター・教授 (12601)	
研究分担者	丸谷　俊之 (Marutani Toshiyuki) (20642177)	東京工業大学・保健管理センター・准教授 (12608)	
研究分担者	本田　善一郎 (Honda Zen-ichio) (70238814)	お茶の水女子大学・保健管理センター・特任教授 (12611)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関